

年次報告書

manazashi annual report 2020

2020

NPO法人子どもへのまなざし





2020年度を振り返って 4

座談会
「コロナ禍の今、子どもの育ちを支える中で感じていること」 6

写真で振り返る まなざしの1年 10

まなざしの事業一覧 12

プレーパーク「なかだの森であそぼう！」から
休校に伴う子どもの居場所「ホッとスペースなかだの森」へ 14

野外保育「まめのめ」
小学校の入学準備って？ 16

あそべ！子どもたち事業
大人の「安心」が子どもの世界をどんどん狭くしていないか？ 18

子どもの育ちを社会で支える学習会の開催 及び 講師派遣事業
西野博之氏講演会より 今の子どもたちを取り巻く環境 20

人の輪(新しい地域概念)の構築事業
あそび場づくりの種まき 出張プレーパーク 23

同じ目的を持つ個人や他団体との協働事業
なかだの森でつながる 24

仲田の森蚕糸公園等清掃管理事業
森のカンリ日記2021 26

情報発信事業 27

2021年度より新規事業となりました
日野市立病院内病児一時預かり事業「おさんぽ」 27

2020年度 ご支援いただいた皆さま 28

決算報告 30



▶ 昨年度までの事業報告書もぜひご覧ください ▶



今、シャンプーしてるの！／多摩川・立日橋下にて

2020年度を振り返って…

当団体だけでなく、日本中いや世界
中が「コロナ禍」の中で試行錯誤する
一年となりました。
振り返ると、昨年の4月末の定期総
会もオンラインでの開催でした。そ
してこの一年は、すべての事業を「感
染拡大防止」の観点で見直しなが
ら行うことになりました。

4月7日に発令された「緊急事態宣
言」。これまでも子どもが主人公の
居場所づくりに取り組んできた私
たちは、ほぼすべてのイベントが中止
となる中、いきなり日常を奪われた
子どもたちのために今こそ「居場所」
が必要だと覚悟を決めて、プレー
パークの開催を続けることにしまし
た。その時参加者には、子ども居場
所を死守するために「遠方からの参
加は控えてもらうこと」と、「大人同
士のおしゃべりを極力控えること」な
どをお願いしました。これまで一緒
に子育てしよう！となかだ横を固
んで大人もくつろぐ場として大切に
してきただけに苦渋の決断でしたが
「集まっている」と外から見られ、活
動が継続出来なくなることはだけ
んとしても避けたかったです。

ありがたいことに、たくさんの方々
に開催趣旨をご理解いただき、プ
ーパークを開き続けることができました。
主管理である子育て課も陸
ながら私たちの活動を見守り、応援し
てくださっていました。改めて感謝申
す。

緊急事態宣言中の4月、6月、毎日
「こんな時だから外であそぼう」と
インスタで発信することにチャレン
ジしました。「子どもあそびの価値」を
発信することも憚れる「コロナ禍」で
したが、こんな時だからこそ身近な自然
の豊かさに気づくきっかけになら
たら…という強い思いがけがら
いでいます。

最近になって「あの時4月、6月の
休校期間」は、なかだの森に来る「こ
だけ」が楽しみだったと話してくる
中学生のつぶやきを聞きました。
緊急事態宣言中「ステイホーム」と
言いながら「散歩はしましょ」とい
うメディアの呼びかけに、当団体事務
所の前の浅川土手を散歩する人の数
が急激に増えた時期がありました。
いつもなら見向きもされない身近な
自然に多くの人が気づくことは、願
ってもないことです。

しかしながら、野外保育「まめのめ」
の子どもたちがのびのびとあそぶ姿
を全ての人が温かく見守ってくれる
訳ではなく、嫉妬みを見ながら見づ
められる「怒鳴られるのではないか」
と内心ヒヤヒヤしていた自分がいた
ことを思い返しています。大人が知ら
ず知らず強め込んだイライラを「危
ないじゃないか」「ケガをしたら誰
が責任をとるんだ」「静かにさせろ」
「きちんと教育しろ」と子どもにぶ
つけ、正義を振りかざしてくる大人も
います。

風通し抜群の広い河原でそれぞれの
ペースで自由に遊んでいる姿が「誰も
が我慢している時に非常識だと言わ
んばかり。大人が指導監督しなけれ
ば子どもは正しく育たない」と思
い込んでいるのでしょうか。

でもそんな時は、気分を悪くさせて
しまったことをすぐに謝り、その場を
離れるしかありません。そしていつ

し上げます。そんな時、全国冒険あそ
び場づくり協会のオンラインの集まり
があり、委託事業として開催してい
る殆どのプーパークはあそび場を開
じざるを得なかったと知りました。

もちろん23区内とは事情が違うけれ
ど「誰が責任を負うのか」と問われ
る中、参加者と力を合わせる「子ども
居場所」を守り続けることが出来たこ
とはとても誇らしく、改めてたくさん
の方々に支えられている活動なのだ
と実感しました。

「くろ・なる・あそび」が今、あそびの価
値を発信するノとした今年度のスロ
ーガン。「コロナ禍で新しい生活様式」
とキレイな言い回しをされても、実際
には経済の冷え込みで大人たちの不
安が増え、生きづらさを抱える子ど
もの数も確実に増えています。

子どもに家でおとなしく過ごして
もらうために、ゲームの時間が増えるの
も当然です。ゲームが悪いと言ってい
るのではなく、ゲームが知らないで
育つ子どもたちの現状に危機感を抱
いています。

緊急事態宣言中の4月、6月、毎日
「こんな時だから外であそぼう」と
インスタで発信することにチャレン
ジしました。「子どもあそびの価値」を
発信することも憚れる「コロナ禍」で
したが、こんな時だからこそ身近な自然
の豊かさに気づくきっかけになら
たら…という強い思いがけがら
いでいます。

「この園はいつから子どもを迷惑な存
在と見るようになったのか」とモヤモ
ヤとした気持ちを持ち帰ることに…
もちろん温かいまなざしを向けてく
ださる方々にもたくさん出会いまし
た。「元氣にあそぶ姿を見ると嬉しく
なるよ」「自分の子どもを思い出し
たよ」「子どもは「アゲアゲ」な
声かけに、どれだけ勇気をいただいた
ことでしょうか。」

子どもにとって、あそびとは生か
る「こと」そのもの。そして改めて、それ
を保障できる「居場所」が欠かせない
と強く確信できた一年だったなあ
と振り返ります。

「仲間とあそび育つ居場所」への
「コツ」を続けていくこと。そしてそ
の「こと」を通して人と人がつながるこ
と。改めて、団体のミッションに立ち
返る「こと」が出来た一年でした。

「コロナ禍は、まだまだ予断を許さな
い状況です。しかし昨年の4月の状態
とは、明らかに違っています。「感染拡
大防止対策」として出来ることは続け
つつも、子どもが子どもを生かすため
に私たち大人が出来ることが原点に
立ち返り、ひとつひとつ丁寧に重ねて
いきたいと思っています。

代表 中川ひろみ



中川 昨年を振り返ると、皆さん、新型コロナウイルスの対応に活われた1年だったと思えます。そこで、本日は日野市で子どもの育ちに関わる多方面の方に集まりいただきました。

まず、昨年度の緊急事態宣言中、都内で児童館を開くことができたところは数少なかったと聞いています。行政の立場でもとても難しいかたと思えますが、そのあたりも含めて、「苦労をお聞かせください。」

清水館長(以下、清水) このコロナになってから、職員の中でも正直、賛否両論だったんです。開けるべきなのか、子どもたちの安全のために閉めるのか。

でもやっぱり人数は多くないけど、この館にも必要とする子どもたちがいたんです。その子一人ではお父さんお母さんがお仕事で、お家に一人でぼつぼつという、居場所がない。

数少なくてもいいから、やっぱりこれは開けていくべきじゃないかという職員の想いと子育て課も、開けていきたいと思います。今こそ児童館が必要とされていることを皆さんに感じてもらう時なんじゃないか、閉める場合じゃないぞという想いが合わさって、開けてきました。昨年、東京都で閉館しなかった児童館って日野を含めて2市だけだったんです。去年の今更けはかなあ。やっぱり本当に子どもが少なく、今日は2人だったね、今日は4人だったね、とか、0の日、0の館もあったりとかしたんですけれども、それでもやっぱり来る子は毎日毎日お弁当をもって来るんですよな。

必要な時に、手に届く場所に。改めて感じた児童館の存在意義

その中で私たちが感じたのは、今まではどうしても来館者の人数に囚われてしまっていて、多く呼ぶにはどうしたらいいか、とか、たくさんの子どもたちに喜んでもらうには：とかって思ってたけど、そうじゃないよね。

その中でも私たちが感じたのは、今まではどうしても来館者の人数に囚われてしまっていて、多く呼ぶにはどうしたらいいか、とか、たくさんの子どもたちに喜んでもらうには：とかって思ってたけど、そうじゃないよね。その中でも私たちが感じたのは、今まではどうしても来館者の人数に囚われてしまっていて、多く呼ぶにはどうしたらいいか、とか、たくさんの子どもたちに喜んでもらうには：とかって思ってたけど、そうじゃないよね。

中川 マスクねえ…表情を見ないで育つってどういうことだろう…。粟澤 特に赤ちゃんのうちって、ほら、舌で承るべさ、とか、まねっこしたり、表情をお互いにすく見合う時期なのに、抱っこもしていないのだから、本当は私たちが表情を見せたい！でもだめだね…とか思ってやっています。すべてクリアになったわけではないので今も悩みながらです。

一同 うん、うん、そうだねー。中川 上野さんは、お子さんの突然の休校で、どんな感じでしたか。

上野さん(以下、上野) そうですね。やっぱりもう、何をすればいいかわからないというのが、なんかこう全然開りが何をしていいのかもよくわからなくて…。下の子はその時、まだ保育園の年長だったんで、勉強させるでもなし、家の中だとゲームやったりだとかスマホ見ている時間が増えて、なんか、これでもいいのかなという感じはずっと持っています。

学校の先生たちもすく色々考えて対応してくださったと思うんだけど、なんか具体的にこういってほしいのか、というのもないし、これでもいいのかなという感じは持っています。ただ、育児って波があって大変な時とそうでない時があるのになって思うんですけど、その時私はそんなに育児に悩んでなかったんですよ。でも、上の子が3歳くらいに悩んだ時があった。もじもじとときだったらと思っ、そつとする。これともつなげない、なんか密室の中で子育てすることを想像すると、世の中

時に手に届く場所に子どもが居場所がない、本当に私たちの意味でないよね、ということころはすく感じました。

だから、去年から始まったコロナ禍では、その時は悩みなが、これでもいいのかな、もつとできることがあるんじゃないか、逆にこまごまやっていいの、とかって正直、職員もすく悩みながらやっていったんです。でも、今となっては、ああ開かないでよかったことだし、あの時開けてたて胸を張って言えたことだし、変わるないって言うことが、こんなに子どもたちを支えるんだなと感じましたね。だから、結果的には、頑張ってよかったと思っています。

中川 ありがとうございます。次に、私たちが一緒に食べるといことを大事にしてきたので、熱食なんてできると、なんかザワザワしちゃうんですけど、そのあたりも含めて、粟澤さんお話をすくお願いします。

粟澤さん(以下、粟澤) ちょうど一年前はモグモグも、開けてはいて、相談はいつでも受けられるけど、中では遊べない食べられないという状況でした。

なので、お母さんたちもモグモグに行っているわけではないと感じているのか、やっぱりそういう状況だと思えます。それに、お母さんの中にも、すく気にされて、まめにアルコールを使う方もいたりして、お母さんたちの不安もあるんだと感じていましたね。

本来、子どもは群れて育つ、人の中で育つ、人の中で育つのに…

本来、子どもは群れて育つ、人の中で育つのに、それができなくなっているのが…。私たちも、赤ちゃんのうちから顔も表情も見せられない、抱っこするの、抱っこしていいですかって聞いて、嫌な人もいるから。本当、ひとつひとつ悩んで今があるという感じですね。ただ、やっぱり顔をみて食べてもらいたい、という思いはあったので、割と早いう

の小さい子を抱えているお母さんは大変だったろうなと思えました。

中川 そんな中、上野さんの小学校でPTA改革を今だから始めたと言っていました。

上野 もともとは、改革ありきでスタートしたわけではないんです。PTAに入ったら一年間必ず委員として活動してねというルールがあって、やっぱり共通の人も増えてるし、習い事もあって忙しくて、無理があるよねというところから、まずはみんなはどう思ってるのかアンケートにしてみようってなったところでコロナが起きて、ちょっと立ち止まれるタイミングだったんです。PTAどう思ってる?どうしたらできる?というアンケートを取ったら、私は意外だったんですけど、意義を感じるという人がすく多かったですね。

ああ、そうなんだとびっくりしたんですが、やっぱり一年間通してやるのか、平日の午前中に集まるのは難しいという声があって、一つの行事に対して、手伝いを募集するボランティア制に移行して、少し前に総会で承認されたところです。

PTAは保護者もつながれる場所でもある

っていうお母さんたちは、コロナ禍で繋がりがなくて一年生のお母さんの中には、小学校に全然友達がいなくて、行事もなくて出会う機会もなくて、どうしたらいいかわからないから、とあります。PTAに来た、という方もいて。学校や子どもたちを支えるのっていいの、もちろんならんですけど、繋がりを求めるためにPTAに来てくれる人もいいので、そこも本当はね、集まって話せればいいけど、ズームとかでつなげてみようか、って今進めているところです。ズーム会議、もう毎週のようにやっていますね。

コロナ禍の今、子どもの育ちを変えよう中で感じていること

2020年度を振り返ると新型コロナウイルスの対応に追われる1年と言わざるを得ませんでした。それは当団体だけでなく、子どもの育ちに関わるすべての大人、そして子育て中の保護者にとっても大変な1年だったことと想います。今回、ひの児童館の清水館長、子育てカフェモグモグ施設責任者の粟澤さん、そして、日野に住む小学生の母 上野郁美さんにご参加いただき、コロナ禍の今、子どもを取り巻く環境、そして感じることを伺いました。(聞き手・中川ひろみ) 対談日:2021年6月22日



清水 緑子さん
ひの児童館 館長
日野には地域に10館の児童館があり、0から18まで幅広く利用できます。小学生のイメージが強いかもしれませんがぜひお近くの児童館をお気軽に聞いてみてくださいね。
なかだの森から一番近いひの児童館で今年度から館長をされている緑子さんは、(同時に兼任される)天真爛漫な施設運営クリエイター。児童館と学童クラブで働き始めて26年になるそうです。

粟澤 稚富美さん
子育てカフェモグモグ 施設責任者
子育てカフェモグモグは(公財)社会教育センターが日野市から委託を受けて運営している、ランチができるカフェ型子育て広場。赤ちゃんを産んだと同時に突然な難になるわけではなく、あっさり悩んだりして子どもと過ごすうちに「難の扉」になっていくのです。モグモグは十人十色の子育てを応援してくれます。施設責任者である稚富美さんほどに「やってみる！」動きながら考える人。日野市の社会教育センターに関わって30年だそうです。

上野 郁美さん
日野市在住 子育て中の母
小4と小1のお子さんをお持ちの郁美さんは、日野に住み始めて10年の子育て中の母です。郁美さんは子育ての傍ら、ライターとして子どもに関わる社会問題に向き合っています。以前、まなざしの活動を取材していただきました。性格は二人曰くおおっぱだそうですが、取材の折はとても共感的に聞いてくださり、もっとお話してみたいと感じたことが今回につながりました。

中川 乳幼児のお母さんたちも繋がりを求めるなあと感じましたよね。モグモグさんは工夫をされましたか？

お母さんたちと一緒に悩んで工夫している。

栗澤 モグモグスタッフの考えていることを押し付けるのではなく、お母さんたちと一緒に悩んで一緒に工夫している、と思つたので、お母さんたちのつらさを、もうみんな拾ってきたという感じがします。たとえば「電話で相談受けるからね」と言っても、わざわざ電話してくる方はいないんだけど、おむつ袋をもらいに来る人がすごく多くて、みんなそのついでに今日ね...とか話をはじめて相談になっていく。

まずは誰かと話したいんだなっていうのがあったので、おむつ袋に子どもと遊ぶキットをつけて、いつでも取りに来てねって収入が減ってしまったと聞いたら、フードバンクのものを置いて、誰にでも持って行ってもらえるようにしたり。困っている人



人の考え方ってそれぞれなんだっていうのを学ぶ機会になった

栗澤 多様性ってよく言われているように、人の考え方ってそれぞれなんだっていうのをあらためて感じて、学ぶ機会になったなと。

右にならえで上手くいったのが、これは自分で考えないといけないんだっていうのが増えたというか、それが学びにもなった。人って考えがちがうんだな、ここまでは一緒だけど、ここからは違うんだとか、同じ人がいないんだなってすごく勉強になったなと思います。

上野 コロナのことを話すのも、言っているのかどうなのか、踏み込んでいいのかっていうのがあった。

休校明けに子ども達が放課後遊ぶのも、どうするかって心配な人もいれば、全然気にしていない人もいて。

そこへ人が難しかったけど、それを「私はこうなんだ」と言えるようになるというのがなあと感じつつ、なかなか難しい。

清水 結構ある子育て相談が、友達と放課後遊ぶのを禁止してる人もいるから、そういう子は家に帰るとこもりっきり、ほとんど友達と遊ぶってことをしなくなっちゃったんです、っていう。

今まであそびの中で友だちとの付き合いを学んできてたけど、高学年の女子とかって友達関係が大変で疲れちゃう。

だから、「コロナがきっかけで家にこもりちゃう、結果うまくいかないから自分の中に閉じこもりちゃうっていう相談はちよちよちよちありますね。

中川 実はこれからが深刻かもしれないですね...

どうぞっていうと、みんな「私より困っている人がたくさんいるから」って遠慮するんだけど、誰でもどうぞっていうとみんな嬉しそうに持って行ってくれたり。

緊急事態宣言中はお友達との顔も見れないし、会おうって連絡もできないし。私たちがつながるきっかけを作ろうと「うちモグ」っていうオンラインを使った子育てひろばにも挑戦しました。

清水 児童館は子どもの人数がぐっと減つたので、職員は日々子どもの相手をしていた時間が空いてしまつていうのがあったんです。

それで何もしなかったら何も生まれないうね、というところで、みんなこぞってやり始めたのが、お家で遊ぶキットや、子どもでも作れるレジンなんかを子どもで作って、児童館の前で配ったり、とにかく知恵を絞っているもやりました。

それで、今まであまりにも来館者対応に追われて気がなかつたんですが、児童館に来ない層っていうのがいるんだよね、というのが分かったんです。

児童館においていていうだけじゃなくて、来ない人がお家時間を楽しむために、児童館がお手伝いできたらいよいよねというところで、大きく視点が変わった。そのひとつで、ツイッターも今まで細々とやっていただけですけど、今こそこのツールを使っていくべきだよと、動き出した感じなんです。

もつとつ、児童館ってすべての行事にボランティアさんに関わってもらつて、すごく大事なんです。

児童館の職員ってなんでもできちゃダメなんです。できないから、できない、助けてっていうと、地域の人が助けてくれる、みたいな。上手に甘えられかかって、児童館の職員の資質で大事なところだったり



中川 最後に、皆さんから見て私たちがまざしの活動はどう見えてるかなって、外側からの意見がまた力になるので、活動が大人よがりにならないためにもお聞きしたいです。

清水 いいなあって思うのは、なんて自由で健やかならうかって、まなごしさん見てると思います。「いいんだいいんだ」って、大人も子どもも受け入れてくれる、そういう温かさや懐の深さがある。

行政は守られてるけど、多少窮屈な部分もやっぱりあって、私、ひの児童館に異動した時、職員に「破天荒な人がきたって言うわ、何がやりたいんです。だから、喉から手が出るくらいいろいろやましい活動(笑)。

そこへんに住んでる子たちが幸せだなんて思うのは、森はあるし児童館もあるし、ただ広いスポーツ公園みたいのもあるし、いろんなフィールドがあって選べるのが、めっちゃいいですね。

して。コロナ禍でボランティアさんが離れていかにようにアイデアを出すのは、今、一つの課題なんです。

今、お母さんからの栄養相談が多くなっている。

中川 コロナ禍の子どもや保護者の姿から感じるの、どうしても経済対策のニーズがとて多いけど、子どもや子育ての方たちに対しては、どうなんだろう？と思えます。

清水 子ども達の適応力の高さに驚かされています。かわいそうだからいそうだって言うのは大人ばかりで、子どもはほとんど慣れていってる。それが頼もしくもあり、悲しくもあり...っていう感じで私は見えています。

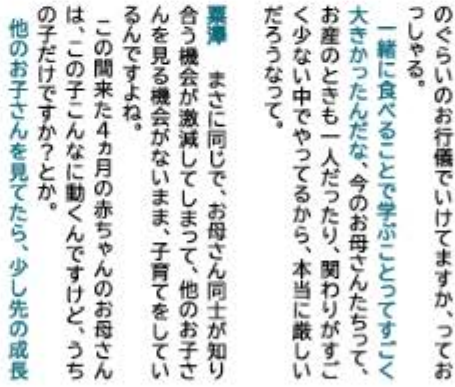
あと、小さいお子さんが来てお昼ご飯食べたりはどうぞ、って言ってるんですけど、今、栄養相談がすごく多くなってる気がするんです。それはなぜかっていうと、他の子どもと一緒にご飯を食べる機会がなくて、1歳でこのくらい置つて普通ですかとか、このくらいのお行儀でいけてますが、おつしやる。

一緒に食べることで学ぶことってすごく大きかったんだな、今のお母さんたちって、お産のときも一人だった、関わりがすごく少ない中でやってくるから、本当に厳しいだろうなって。

栗澤 まさに同じで、お母さん同士が知り合う機会が激減してしまつて、他のお子さんを見る機会がないまま、子育てをしているんです。

この間来た4カ月の赤ちゃんのお母さんは、この子こんなに動くんですけど、うちの子だけですか？とか。

他のお子さんを見てたら、少し先の成長



結局は人が大事だと思う。信念や想いがみんなに伝わる。

栗澤 私は本当にうらやましい、素敵な活動だなと思って、応援しています。

フィールドはもちろんですけど、あとはやっぱり人だと思ってる。どんな人たちがどんな場所を創っているか、信念や想いがみんなに伝わるんだらうなって思っています。

うちは委託事業なので、想いとやっていると、どこまで、本当にいつもぎりぎりを攻めていて(笑)。

栗澤 本当にいろいろ悔しい思いもしたり...だけど、それは私たちに課せられているものにちゃんと応えるのも委託事業の使命だと思つてやっています。

清水 モグモグさんは、去年とか、施設の前でビニールプールを足をつけて絵本を読もうってやりましたよね。なんて発想が柔らかいんだらうって。

栗澤 いらなくなつた絵本を捨てようと思つて、置いていても誰も持っていけないから、じゃあまずはプールに足をつけて自由に読んで、気に入ったら持って行ってという場所にしたんです。

あの時は、ちよちよち夏休みで、近所のおじいちゃんおばあちゃんが「孫が帰ってくるから何か用意してあげないといけないけど、これ、ちよちよちいいね」って絵本をもらつていたりして。

中川 でも、そういう面白いことができるとのが楽しいですね。

栗澤 そうそう、そうですね。

が見えるんだけど、それがコロナ禍で見れなくて、分らない人が増えてるなって思っています。

いから新しい生活様式っていつても、私たちが育つために必要なもの、条件環境っていうのは変わらないんじゃないかなって思つていて、その中で赤ちゃんもお母さんも人の中で育つていく、人を見ながら、話しながら育つてくつていう体験が減っているのが心配だなと思えます。

そもそもベースの価値観って保護者は話す機会がない。

上野 私は保護者間の価値観の違いが、このコロナ禍で出ているのになんて思っています。

昨年度の卒業式で、保護者が出れないという決定があつたけど、その時も話し合いをして決めたという保護者がいたり、これは子どもが最優先だから出席すべきじゃないとか、色々な人の意見があつて...。そもそもベースの価値観って話す機会がないから、それが出てきた時のまとめ方って難しいのかなって思いました。



上野 私は、一昨年から日野市の「対話プロジェクト」っていう教育委員会と市P協保護者で対話をしていこうという中に入ってるんですけど、そこにまなごしのお母さんたちがたくさんいるんです。

すごくいいなと思うのは対話のベースがきちんとあるところ。話してみないと分からないじゃ、っていうのがあつて、どっちが正しい、間違ってるじゃなくて、話しながら決めてるっていうのがすごく感じられて、子育てに悩んでいるお母さんも多いと思うんですけど、日野は米田教育長も困っている人を目を向けてくださる方だし、行政の方もとてもがんばっているし、モグモグもあるし、仲田の森もあるし、悩んでいるお母さんたちを包み込むようなものが日野にはいっぱいある、困つていたら安心して「よく聞いてくれる、困つていたら安心してます」とかにつながつてみてほしいなと思います。私は、森にいつも通つているとかではないけど、見えないうちで安心感があるっていう風に感じています。

清水 どこも結局は人です。どんなに素敵なハードがあつても、注意や管理しかない人しかいなかったら意味がないから。そこは人なんだなって思う人たちが子どもたちを見守ってるって日野はいい環境だなぁって思っています。

栗澤 一回 うんうん。

今回はお忙しい中、ありがとうございました。立場は違っても同じようにお話しする時間を頂けたらいいなと思います。例より心地よい時間でした。

担当者「うんうん、私も話が盛り上がり、もつと話を聞いていたという気持ちでした。これからもぜひお話ししたいです。」(ひろみん)



1. 河原でたくさんの石コロの中から「オンリーワン」をさがす
2. イナゴを追いかけて
3. 川がきで、みんなで魚を捕まえたよ
4. なにかいる！？
5. 出張プレーパークin西平山
地域の川で、子どもだけでなく大人も夢中になってあそびました
6. 「あー、たのしかった」 たくさんあそんだ秋の夕暮れ

コロナ禍だって、子どもは群れて育つんだ！

1. 2才だって、自分の限界に挑戦！
うしろ姿がたくましい
2. 仲間がいるから、楽しさ百倍！
3. 自分の力でどこまで行けるか
「飛び出せ！冒険隊」
4. 冬がきの一コマ、福利の終わった田んぼを
コースに見立てて、よーいどん！
5. ザリガ二との真剣勝負

今を生きる子どもたちにとって本当に大切なことをあなたと一緒に考え続けたい。 「子どもが真ん中の社会」を目指して... 子どもへのまなざしは以下の活動に取り組んでいます。

子どもが主人公の居場所



プレーパーク「なかだの森であそぼう！」

子どもにとってあそびは生きることそのもの！
プレーパークとは、子ども自身が「やってみたい！」と思うことを実現していくあそび場です。豊かな子ども時代を過ごすためには子どもたちが日常的に「やってみたい！」に挑戦できる場を私たち大人が創り出す必要があります。

◀とても風が強かったある日の森開帳日。ブルーシートで飛べるか実験！

子どもがいきなり仲間



「子どもを真ん中に考える人の輪」をつなげていく

大切なこの街で安心できる人間関係を築く

子育ては決してひとりではできません。人と関わるのはめんどくさいことが多いですが、それを一歩超えて、私たち大人が安心できる人間関係を築き、人の中でつらく感覚を取り戻したいと思います。

◀「川のプレーパーク」も2年目となりました。どんどんあそびが広がります。

大きな家族のようによく子育て



外遊び自主保育サークル「はだかんぼう」の支援

大人も子どもも一緒に育ち合える場に

「はだかんぼう」は自然の中で子育て、親育ちをしている自主運営の親子サークルです。その場にいる大人は子どもたちみんなの親のように、子どもの今と子どものあそびの世界を大切に、子どもたちの間に生まれるいろいろな関わりを見守っています。

◀代々引き継がれている「はだかんぼう」のロゴマーク。随時メンバーも募集しています。

子ども仲間と、子どもあそび



野外保育「まめのめ」

子どもの「今」と共に歩む

1歳児～就学前までの子どもたちが共に過ごす保育の場です。地域にある森や川、丘を中心に季節や天気や日々変わっていく自然をまるごとフィールドにして仲間とことごとくあそび日常を重ねています。

◀このコロナ禍、他の事業でも利用した「まめのめバス」。日野市内を一日2～3回走っています。皆さんは見たことありますか？

子ども時代のあそびを記憶する



あそべ！子どもたち！事業

日常の「あそび」を広げるきっかけに

子ども時代の「あそび」を保障するための取り組み「あそべ！子どもたち！」事業。「川であそぼう！ちびっこ団がきんちよ団」「飛び出せ！冒険隊」の取り組みを通して、山や川であそぶことを特別な体験としてではなく、「日常のあそび」を広げるきっかけになることを目的に開催しています。

◀「川であそぼう！がきんちよ団」のワンシーン。森に集う高校生らがボランティアで参加してくれました。

子どもの育ちと社会とを



講演会・学習会を開催する／講師を派遣する

子育て真っ最中の人と考え続ける

人との関係が希薄な時代だからこそ、共に学び合うことを大切にしたい。「子どもにとって本当に大切なこと」を子育て中の人や子どもの育ちに関わる人と学びたいと講演会・学習会の開催、講師派遣の取り組みを行っています。

◀西野博之氏講演会。会場は感染対策のため50人限定とし、オンライン同時配信にも挑戦。会場は西野さんの想いを受け取ろうと熱気に包まれました。

共に「あそび」



協働する

団体の枠を超えて、子どもが育つ環境づくりに取り組む

「子どもたちにとって本当に大切なことを第一に考える社会」を実現するためには、互いの違いを認め合い、支え合う関係づくりが必要です。同じ目的を持つ、主に日野市内の他団体や個人と協働しています。

◀コロナ禍の2020年度、日野市まちづくり市民フェアは日野で活動する団体がYouTubeで活動紹介の動画配信を行いました。



仲田の森蚕糸公園を整備する

地域のおそび場を自分たちの手で

2013年4月より「仲田の森蚕糸公園」の公園清掃など作業に関して日野市より業務委託を受けています。

◀秋以降、お酒の瓶、缶やたばこのポイ捨てなど、ゴミの放置が多数見受けられるようになりました。また、樹木が放電に切られたり折られた箇所が目立つようになり、長期化する自費生活のストレスを発生しているように感じています。

情報発信する

一人でも多くの人と考え続ける

「今を生きる子どもたちにとって本当に大切なこと」をより多くの人と考えるため情報発信しています。

◀緊急事態宣言中には、「こんな時だから外であそぼう」を毎日発信しました。Facebookでは、まなざしの全事業のお知らせや報告、活動写真などを発信しています。アカウントを持っていない方も見れますので、ぜひチェックしてくださいね。



「はいわってどんなこと？」
 (作・絵 浜田莊子/童心社)
 日本・中国・韓国の絵本作家が手をつなぎ
 子どもたちに送る絵本シリーズ
 当日は3カ国語で朗読していただきました
 日本語: 藤崎由美子さん
 中国語: 李秋倫(リイールン)さん
 (中国内蒙古自治州/2000年発行)
 韓国語: 林松伊(イムソンイ)さん
 (韓国大田出身/2010年発行)

緊急事態宣言中、「休校に伴う子どもの居場所」
 「ほっとスペース」なかだの森」¹⁾として開催し
 てきた「なかだの森」であそぼう」²⁾。
 緊急事態宣言による休校期間中には、本来なら
 学校や部活動で忙しく、なかなか会えない高校
 生も顔を見せてくれてゆつたりした時間を過
 しました。特に高校一年生は「中学生じゃないけ
 ど、高校生でもない」という所屬感のない状態で
 集う場を強く求めていたように感じます。
 そんな中、5月に全3回で取り組んだのが「高
 校生のしゃべり場」。毎回テーマを決めて自由
 に話しあってもらったことが、それぞれの今の気持
 ちを受けとめ貴重な時間となりました。そ
 して、この取り組みを通して高校生にとってのな
 かだの森が「あそび場のひとつ」から「自分の居場
 所へ」と変わるきっかけになったことが何より嬉
 しいです。
 8月には、昨年末に日野市が設置してくれた2
 つの物置の屋根の補強を行いました。小学校高
 学年以上の子どもたちが木登りついでに、物置
 の上に登っても物置の屋根が壊れてしまわない
 ようにするための工事です。外部講師(かまやん)
 にご指導いただきながら、中高生やお父さん
 たちと一緒に作業し、しっかりと補強の屋根
 ができあがりしました。
 今ではすっかり小学校高学年・高校生たちのく
 つろぎスペースとなっています。

休校期間を通して 中高生の居場所にも



子どもが主人公の居場所の設置・運営事業
 プレーパーク「なかだの森であそぼう！」
 休校に伴う「子どもの居場所」
 ほっとスペース「なかだの森」



平和について考える

終戦記念日の前日である8月14日、「なかだ
 の森であそぼう」終了後に、野外映画会を開
 催しました。
 絵本「はいわってどんなこと？」を日本語・中
 国語・韓国語の3カ国語で鑑賞しました。
 テーマにした映画をみんなで鑑賞しました。
 伝えられる「いのちの大切さ」
 「生きていくってステキだよ」というメッセー
 ジが心に響き、続く戦争をテーマにした映画の
 世界に子どもも大人も引き込まれました。
 「平和について考える取り組みはかねてより
 実現したいことでした。75年前の戦争を体験し
 ている人が少なくなっている今、これからは生
 きる子どもたちに平和の尊さを伝えていくこ
 とは、とても大切な大人の役割だと思います。
 コロナ禍のため、事前告知はできませんでし
 たが、継続していきたい取り組みです。

コロナ禍の「なかだの森」の動き

- 9/12
- 7/13
- 5/23
- 4/10
- 4/7
- 4/3

4/3 感染予防対策をしっかりと取るために1回お休みとした。
 毎週、緊急理事会を重ね団体の方向性を決定。

4/7 緊急事態宣言が発令され、ゴールデンウィーク明けまで
 休校延長が決定。

4/10 プレーパーク「なかだの森であそぼう」を
 「休校に伴う「子どもの居場所」
 ほっとスペース「なかだの森」
 」と名称を変更して開催を始める。

5/23 「開催にあたり決めたこと:お願ひしたこと」
 ■対象は小学生以上18歳
 ■基本的に「これまで「なかだの森」であそぶだ」ことがある方で
 遠方からの参加は「遠慮いただいた」
 ■小学生以上は子どもだけの参加(大人の人数を制限するため)
 ■雨天時は、屋根の下で密が想定されるため、中止
 ■土曜の森も、参加人数が多いため中止
 ■食事中、また食器などを介しての感染を防ぐため
 「なかだの森」と食器の貸し出しを中止
 ■受付で記名、検温、消毒液の設置(こまめな手洗いの呼びかけ
 ■「密」を避けるため、いつものネットや遊具は設置しない
 ■スタッフを含め、大人はマスクの着用をお願いした

緊急事態宣言が解除されるも
 引き続き「ほっとスペース」として開催する。

7/13 月1回のペースで土曜森を再開。
 再開後は家族連れが多く訪れ、安心して親子でくつろげる
 居場所を求めていることを強く感じている。

土曜森を月2回の開催に戻す。

そして現在も、記名・検温・なかだの森の中止などの
 対策を継続しながら開催しています。

いつもある場所、 戻れる場所

緊急事態宣言で休校になった時、最初は「こりゃ、子どもに
 とってはホッとしたお休みだね」と嬉しかったが、
 ちやうど中宇2年を迎える時期だった我が子にとつて見通し
 がたない不安がどれほどのものなのか、最初は想像すらし
 ていませんでした。
 いつ終わるか分からない、ひたすら家で過ごす日々、最初
 は春休みが延びてラッキーくらいだった我が子も、日が経つ
 につれ、動画を見続け、生活リズムは完全に崩れ、そして、そ
 んな自分を「なんてダメな人間なんだ」と責めて、とそんな
 毎日を送るようになっていきました。
 「私やらなきやいけないことがない」と強張れないみたい。
 ずっとこのままだったらどうしよう。みんなは頑張ってるが
 も、「ふと我が子から出た気持ち、そうだよ、中学に入學し
 てから「高校受験」という身体の知らない言葉に追いつけら
 れてきて、突然の休み、不安だよ...」
 でも、そんな我が子を見ていると、私も息が詰まりそう。
 みんなは頑張ってるかも。そう、私もそのみんなはもつと
 うまくやってるかも。感に襲われていたのです。テレビや
 SNSで流れてくる、「おうち時間」はどれもキラキラしてて
 羨しそうで、家だけ過ごさずのびのびと感じる日は
 自分を責める材料にしかありませんでした。
 そんな親子の心の拠り所がなかだの森でした。
 私は、ちやうどだけ会えた人と「大変だね」「しんどいわ」そ
 んな言葉を交わせました。私にとっては、コロナ禍を上手く過
 ぎす方法を知るよりも、顔を見て少し交わらせる一言が何倍も
 心を癒してくれました。

そして、我が子もなかだの森の日は息を吐き出さずと出かけてい
 きました。我が子が友だちと笑いあっている姿を遠くから見
 るだけで「ああ、あんな穏やかな顔で笑えるなら大丈夫だって
 安心できて、しっかりと息が吸える気がしました。
 そんな我が子は、緊急事態宣言が明け、少しずつ森から離
 れて、現在に立ちます。でも、きつとまた何かあった時もち
 ん、何もなくても、いつでも戻れる場所、いつもある場所、そ
 う思っているだろうなと感じています。

【2020年度の「なかだの森であそぼう」は...】
 年間実施回数 62回 延べ参加人数4,299名(大人1,255名、子ども3,054名)

野外保育「まめのめ」



小学校に入学してから困らないために、幼児期をどう過ごすか？小学校入学が近づくと、毎年母たちのソワソワが伝わってくる。

「これまで『あそび』が大切と通してきてきたが目の前によく解らない『学校』という淵を前に我が子は大丈夫だろうか？と不安が膨らんでくる。

もちろん不安に蓋をするのではなく、周りの大人同士語りあうことはとても大切。不安に飲み込まれないように大人だって仲間が必要だ。

一方の子も私たちは、もちろん小さな不安がないわけではないが『ずっとこのまま、まめのめに居てくれる？』と聞くと決まらずに『やだーもう小学生になるんだもん！』と誇らしげに答えてくれる。みんな小学生になることを楽しみにしているんだなあと感じる。そしてそれで十分だと思つて送り出してきた。

では、小学校に入学して子どもたちが困ることってなんだろう？

もしかしたら、大人が困ることを避けたいだけかもしれない。みんなに迷惑かけたらどうしよう？「勉強ついていけないから」「友達とまよくやれるから」「いやいや、そのすべてが子どもたちに必要なことと捉えたい。上手いかなにかがつかって、そこで自分はどうしたいのかを考える。その機会を、大人のおかげで奪ってしまうのは違うと思うのだ。我が子が困る姿が見たくないのだから前の親心。

でも、転ばぬ先の杖ががんにがらめの幼児期でいいはずがない。そもそも学校は失敗したり迷惑をかけあうことが出来る場所だと思つてきた。だから、出来るのは「困った時には一緒に考えるよ」という姿勢と親も本音がつがやける信頼できる相手を持つことが大事なのだと思う。

「トイレに行きたくもないのに、みんな行かないとダメーとか意味わかんない」「まだ教えてくれないのに、たくさんのルールがひらがなで書かれてて読めなくて言われる」これは今年小学校に入学したばかりの卒園児Sくんのつぶやき。

今までと違うことへの戸惑いの中に、指示や命令ばかりでボクの気持ちを察してもらえない！という叫びが聞こえてくる。我が子の不満を聴くお母さんはさぞ大変だと思われるけれど、私は「さすがーいいいいねー」となんだが嬉しい気持ち。そしてついに彼は担任の先生に自分の気持ちを訴えたいとお母さんに話したそうだ。

そうそう、君はいつも自分の気持ちを言葉にして伝えながら、自分で考えて納得して行動していたものね。いつも「まったたく、またひろみさん解つてない！」って呆れられながら一緒に歩んできたものね。

卒園後のことは、それぞれの地域の小学校にお任せして・・・と思つてきたが、この2、3年、「学校に行きたくても行かない」「行かないことを決めた」「子どもたちとの出会いが重なり週1回のプレーパーク開催だけでは居場所になりきれないと感じるようになった。

学校は心が折れてまで、そして命を削つてまで行かなくてはならない場所ではないはずだ。

2020年度の西野さんの講演会でも「やりたいことを先延ばしさせられる今の子どもたち」のことが話されていた。

「学校もリでも居場所がある」この意義を強く感じている今、次のステップとして目の前の子どもたちにしっかりと向き合い、新たな居場所づくりのための準備を進めていこうと思つている。

(ひろみん)



保育園、幼稚園を卒園するまでにやつておかなければならないことというか、卒園の資格というものがあつたらばそれは仲間といつしよに楽しく遊べることひとり遊びよりは仲間と遊んだほうが何倍も楽しいという習慣、いわば、そういう能力を子どもが身につけることだと思ひます。

そういう感情、感性、機能、能力を身につけることが卒園の基本的な資格だと思ひます。

そして、子どもはひとりで育つのではなく、仲間と育ち合うということを知ることが、こんどは親や家族にとつての卒園の資格です。

ですから、自分の子どもがちゃんと育っているという事は、

自分の子どもといつしよに育ち合つてくれる子どもたちがたくさんいることなのです。

こういうことに対する認識と感謝を親がもつことが保育園、幼稚園を終えるにあつたつての必要な条件なのです。

仲間といつしよに楽しく遊んだという体験、それが欠けていたらほかになげができたつて小さな必要条件是満たしたかもしれないませんが、十分な条件は満たしていないことだと思ひます。

その条件を十分に満たしておかないとその後、社会的に生きていくためには、子どもはそのすませていないことを何歳になつてもやらなくてはならないことになるのです。



野外保育「まめのめ」が大切にしていること

- 子どもの「今」と共に歩む
- 子どもを信じて受け入れる
- 親も子ども、育ち合う関係づくり

【2020年度の野外保育「まめのめ」は…】

■ コロナ禍でも閉園せずに活動
 コロナ禍でも閉園することなく活動した。日頃から風通しのよい屋外で活動していること、スタッフも日野市内に在住し公共交通機関を使つての通勤がないことに加え、遠路バスがあることで活動中の移動も不安が少なくとも強みに感じた。緊急事態宣言中は、各家庭の判断で登園するかどうかを決めてもらった。それは、何よりもお互いの気遣いがあつたから出来たことである。こんな時だからこそ不安な気持ちに蓋をするのではなく、お互いの気持ちを受け止めあうことが欠かせないと強く感じる1年となつた。

■ 野外保育「まめのめ」が「認可外保育施設」に

幼児教育保育無償化がスタートして1年半、無償化の対象となる「認可外保育施設」は、東京都に届出を行い、国に定める基準を満たすことが必要である。しかし、現在基準を満たしていない施設はこれから基準を満たすために2023年10月まで猶予期間を設けている。世帯の総所得金額が減り共働きが増えているという社会状況の中、まめのめも無償化の恩恵を受けるための検討を開始し、理事や保護者と話し合いを重ねた。

「認可外になると保育の質が変わるのではないか」という点が最大の懸念

事項であつたが、「まめのめ」らしい保育を目指すことは認可外保育施設になつてもできるかと判断。認可外保育施設の指導監督基準をすでに満たすことはできないが、課題であつた床面積も、2月に隣家を借りる合意ができたことで、基準を満たす方向性が見えてきた。

届出や設置基準を満たすためのスケジュールづくりなど、事務作業が増えることへの懸念もあつたが、保護者有志が事務局を担出。2021年4月に東京都認可外保育施設の届出を提出する運びとなつた。

大人の「安心」が 子どもの世界をどんどん 狭くしていないか？

橋りょう名	多摩川 橋りょう
位置	東京都府中市町田 26°35'7"80
支間	19M20
塗装年月	2006年6月
塗装回数	4回塗
塗装種別	下中塗 厚膜型水性エポキシ樹脂系塗料
及塗料名	上塗 厚膜型ポリウレタン樹脂塗料
塗料メーカー	神東塗料株式会社
施工者	建設塗装工業株式会社

「飛び出せ！冒険隊！」に取り組んで9年目。コロナ禍の中でも参加希望者が増える人気企画に成長した。

その日だけのイベントではなく、回を重ねると子どもたちの心も通へるようになってきた。「もっともっと自由自在に自転車を操れるようになりたい」という気持ちが増え、いく姿が何より嬉しい。

そして自転車で走るのが気持ちいいのは夏だけではないはず……と2020年度は、秋にも日帰りで冒険の旅をしてみよう！とチャレンジした。

しかし、しかしである。自転車で走って気持ちがいい季節のサイクリング道路は、大人のロードバイクだらけ。引率しているところだけとばかりに猛スピードで橋を走りすぎる大人たちのロードバイクに正直ビヤビヤするシーンがとて多かった。

「たまたま」ではなく「ホクの子」の頃は、目的地も決めずに子どもだけで十手をとこまで行けるかひたすら走ったり、工事現場の盛り土を乗り越えることに挑戦したりしてあそんでいた。

「ふんっん、私も子どもの頃たいがんな代は通うが、道路で自転車で内を描いてみたり、ロードスケートで坂道を駆走したりしていた。今そんなことをしたら、すぐに警察に通報されるのがオチだ。」

大人のよかれの注意が多すぎ、子どもたちのあそびはどんどん小さくなっていくしかないのだから……注意ならまだよい。大きな声で怒鳴ったり、舌打ちして大人もいる。サイクリングロードはいつの間にか自転車専用アがスピードを出してトレーニングする場所に変わってしまったかのようだ。子どもたちが自転車で走って上手く乗りたいと練習したり、川の景色を見ながらのんびりお

散歩することが難しくなっている。土手は車が通らない安全な場所ではなく、大人の趣味に占領されてしまったかのようになってしまった。子どもたちが自由な行動範囲がどんどん狭くなっているのではないか？「自分の力で自転車をこいであそびに行きたい」という経験が子どもたちの日常のあそびを狭めてくれるのではないか？という思いからスタートした。この企画、車での移動が当たり前になっていく今、子どもたちが自分の力を試せる機会がなくなってしまう。

そして実際、1日中自転車で遊びながら長い距離を走ると、出発する朝は「フツフツ」としていた後ろ姿が安定して明らかに「巨尻」をもって走れるようになってしまっている。自転車で遊ばせてはく、みんなと遊んでいっているうちに……というところがキモ。また遊ばせたいと別れる顔が頼もしく輝いている。

そして気づいたこと。子どもたちが自転車で出かけるようになってしまったのではなく、子どもたちが取り巻く環境が思っていた以上に「がんじがらめ」だったということ。そして大人が「危ないから」と、都合よく子どもたちを狭い世界に閉じ込めてしまっているのではないか。大人の安心が子どもたちの世界をどんどん狭くしてしまっているのだろうか？

子どもたちが自転車を自由に乗り回して冒険する姿を取り戻したい。とても小さな一歩だけれども「やってみよう」という子がいる限り、諦めずに子どもたちと一緒に冒険の旅を続けていきたいとたちもつと昨年を振り返った。

(〇ちゃん)

写真：飛び出せ！冒険隊！秋のツーリングへGO！



「日常のあそび」を広げるきっかけに…

今、子どもの体力不足が叫ばれています。どんなにたくさん自然があっても、とことんあそび時間、一緒に遊ぶ仲間がいなければ、豊かな「子どもの時間」にはなりません。私たちは、山や川であそぶことを「特別な体験」ではなく、「日常のあそび」を広げるきっかけとして開催しています。活動を通して、子どもたちの「やってみたい」を保障することの大切さを実感しています。

プログラムをがっちり決めて、それに子どもたちを当てはめるのではなく、活動で出会った子どもたちに合わせ、企画も柔軟に変化させながら活動を続けています。2020年度はコロナ禍ではありますが、このような時代だからこそ子どもたちが地域の自然の中で仲間ととことんあそぶことを保障したいと例年とは形を変え、開催しました。

2020年度のあそべ！子どもたち事業は…

今年度、全ての活動でキャンセル料を設けず同時に、定員を減らし、公共交通機関を使わないなど、コロナ感染拡大防止に努めました。

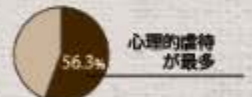
- 川であそぼう！ちびっこ団 → 「親子で川あそび」に企画変更（7/18予定・台風のため中止）
- 川であそぼう！がきんちよ団 → 小学1～3年を対象を変更 / 例年宿泊含め4日間を日帰り2日間に変更(8/1～2)
- 飛び出せ！冒険隊 → ビギナー・マスターともに1日の日帰りとし、なるべく多くの子どもたちが参加できるように一人1日のみの参加とした (A:7/23 B:8/29 マスター:8/8 秋のツーリングへGO! :11/1)
- 冬をあそぼう！がきんちよ団 → 例年通り3日間で開催(12/26～28)

子どもたちは今、どんな時代を生きていこうだろうか - 西野さんの話から -

児童虐待

2019年度相談対応件数

19万3,780件
29年連続過去最高



※全国の児童相談所が対応した児童虐待の相談件数 (2020/11 厚労省発表)

子ども虐待による死亡事例

死亡人数 **73人**
毎週1人が亡くなっている

0歳で死亡した子どもの数は28人にのぼる

※厚労省社会福祉審議会児童部会児童虐待等対策推進部会に属する専門委員会

不登校

全国小中学校の不登校児童生徒数

18万1,272人
増え続ける不登校児童生徒

(昨年度より**1万6,000人以上の増**)

※文部科学省発表 (2020/10)

不登校の子、引きこもりの子、という子どもはいない。ともに、誰にでも起こりうること。

ひきこもり

半年以上、就学・就労していない家族以外とコミュニケーションをとっていない人が

全国で**100万人以上**

40~64才 **61万人**



※2016年9月/2019年3月内閣府・全国実態調査による推計

いじめ

「いじめ」の認知件数

61万2,496件
小中高校での認知件数



※文部科学省発表 (2020/10)

子どもの自死

小中高生の自死

1年間に**399人**

※厚生労働省発表 (2020/3)

そして今、コロナ禍により子どもの自死が増えている

2020年4月~10月だけで小中高生の自死

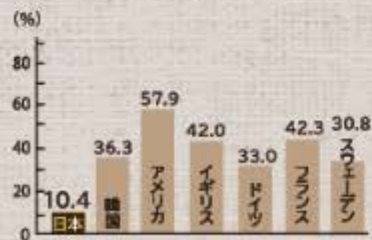
246人

(昨年の同時期より**30%の増**)

NHK「おはよう日本」20.11.24放送

「自己肯定感」に関する国際比較

自分自身に満足している割合



日本の若者のうち、「自分自身に満足している」という質問に対して、「そう思う」と回答したのは、わずか10.4%。諸外国と比べても極端に低い。

※内閣府令和元年版『子供・若者白書』/第13才~29才の男女が対象

【2020年度の講演会について】
2020年11月29日(日) 講演会「withコロナの今だから考える 子どもの大事な命の根っこ」

講師 西野博之氏
(NPO法人フリースペースたまりは理事長/川崎市子ども夢パーク所長/フリースペースえん代橋/神奈川大学特別助産講師/精神保健福祉士)

後援 日野市 / 日野市教育委員会 参加人数 230名 (会場 限定50名/オンライン参加 180名)

通信46号でも「西野博之さん講演会報告」特集を掲載しています。ぜひご覧ください▶



子どもの大事な命の根っこ

命の根っこ

withコロナの今だから考える

「こんな時代だからこそ沢山のひと、会場・オンライン同時開催」

生きてただけですごいんだ。 - 西野さんの言葉たち -

「助けて」と言えない社会。自立が叫ばれるようになって、孤立が増えた。自立とは、一人で何でもできることではない。適度に人に依存できる力が「自立」に必要なこと。

「子どもの最善の利益は何か」子どもと共に、大人たちが考え続けることが必要。コロナ禍、その中止、禁止は本当に必要な？ 常識や正論にとらわれず、自分の頭で考える。

これからどんな社会になるのだろうか？ たくさんの「不安」を抱えながら生きている。だからこそ、ますます「居場所の確保」が社会的課題になる。

子どもは「今」を生きている。大人もゴールを設定して逆算して心配する癖から遠ざかってみよう。「今持っている力で、今を生きる。」

魔法の言葉「さっと大丈夫！」を届けよう。

その子の「今だ！」はきっとくる。子どもを信じて、子どもの命に寄り添おう。

そして...
生まれてきてくれて、ありがとう！
あなたがいるだけで、幸せだよ。

「子どもにとって本当に大切なこと」を子育て中の人、子どもの育ちに関わる人、全てのひとと学びたいと毎年、参加費無料の講演会の開催を重ねています。
「2020年度はコロナ禍でありましたが、こんな時代だからこそ今を生きる子どもたちにとって本当に大切なこと何なのか、沢山の方々と学びたいと、西野博之さんをお招きして、会場・オンライン同時開催の講演会に初チャレンジ。コロナ感染拡大防止のため、完全申し込み制とし、その際、西野さんへの質問を募集し、子育て中の方、場を創っている方からたくさん熱い想いを頂きました。西野さんへ皆さんからの質問を事前にお伝えしたところ、講演会はその事前質問を網羅する形で組み立ててくれました。オンライン配信では事前にも何度もハイパー話を重ねましたが、たくさんの方に視聴頂いたこともあり、回線がたぎたぎダウンしてしまいました。オンラインで聴講された方々からは聞きづらい部分があったとの報告を頂き、配信の難しさを感じたと同時に、皆さんがそういう状態でも温かく見守り、声をかけてくださったことをとてもありがたく感じました。(その後、西野さんに「ご了承ください」12月14日より2週間、オンラインで聞きづらかった方々を対象に配信を行いました。)

今回の内容を踏まえ、日野市の校長会で講演会の趣旨と配布の協力をお願いし、初めてチラシを日野市全中学校に全戸配布を行いました。実際、中学生以上のお子さんをお持ちの方のお申し込みが30%近くを占め、今まで出会えなかった方々に西野さんのお話を聴いていただけたと感じています。

あそび場づくりの種まき「出張プレーパーク」

2019年度に西平山・旭が丘地区にお住まいの皆さんと知り合うきっかけとして初めて開催した「出張プレーパーク」。

出張プレーパークによって目の前の子どもがあそび姿から大人がなにかを感じたり、地域のあそび場を再確認してもらえる貴重な取り組みであると感じました。

そして、2020年度、「あそび場づくりの種まき」をする想いで

2回目の「出張プレーパーク」を開催しました。

子どもが豊かに育つためには、地域のあたたかいまなざしが欠かせません。地域の皆さんとの出会いを大切にしながら、これからも地域の子育てや子どもたちのことを共に考え、大人も子どももつながる輪を創り続けていきたいと思っています。



川のプレーパーク (9, 5)

長沼村周辺の浅川

参加者151名(大人54名 子ども97名)

野外保育「まめのめ」で日々川であそんでいるからできる、川のプレーパーク。コロナ禍のため、チラシ配布も制限したが、川あそび日和に恵まれ、たくさんの方々が子どもたちと一緒に川あそびを楽しみ姿が見られた。



公園でプレーパーク (11, 15)

旭が丘中央公園

参加者129名(大人49名 子ども80名)

「ビー玉持って来たよ」「トンカチやってみたい」「ペーゴマできるかな?」とチラシを振り回してやってくる小学生の姿に、チラシを眺んで楽しみにしていたことが伝わってきた。



ことな広場 (11, 13)

川口地区センター

参加者103名(大人18名 子ども85名)

ことな広場は月1回の定期開催を始めて4年目。すでに地域の大人たちの手で運営されていることを感じ頼もしい。共催することで新たな出会いもあり、今後につながる手応えを感じた。

やっぱり私たちに遊び場が必要だ!

2020年度の平山ことな広場から

2020年度の平山ことな広場は悩みに悩んでの実施となりました。

休校中だった子ども達に何とか遊びの場を開きたいと、3月いっぱいこれまで通り開催でしたが、4月に1回目の緊急事態宣言が発出されたからは普段使わせて頂いている地区センターも使用できなくなり、4〜6月は中止としました。

また新型コロナウイルスの性質も分からず、「人と会うことがまるで悪いことのような風潮の中、私自身も感染に対する不安や恐怖もあり、たくさんの方が集う遊び場を開催する気持ちになれなかったというのが正直な気持ちでした。

そんな日々を間々としていた6月、公にはことな広場は中止だったのですが実はスタッフとその家族でこちんまりといつもの場所に集合、小さな遊び場を開催しました。

梅雨時期なのに快晴で、新緑の隙間から漏れる日差しがキラキラと心地よく、「あ、生きてる〜」って感じたことを覚えてます。心地よい空間で子ども達が生き生きと遊んでいるその姿を見て、「ことな広場を再開したい」と強く思いました。

そこで、7月からは今までことな広場のとっておきのお楽しみだったお餅を中止すること、参加者もしっかり把握することなど、感染対策を講じた上でことな広場を開催することに決めました。

「再開を待ってました!」「行くところがなから助かります!」とたくさんの方が遊び

にきてくれて、「やっぱりやって良かった、これがやりたかったことだ!」、と確信が持てました。そうして迎えた12月の出張プレーパークには、過去最大100名を超える子どもと大人が集まりました。いつものことな広場のんびりしていいけれど、出張プレーパークはみんな心が踊ります!

だって「あ、たもつが、ひろみさんが来てくれるんだもの、やっぱり集まった子どもたちの目の輝きがちょっと違う?」(笑)。この日は私も遊びを周りの大人に任せて、おしゃべりを楽しみました。「マスクは嫌だ」「習い事がなくてつまらない」「給食も静かに食べるなんてつまらない」と子どもたちの本音がぽつぽつ聞こえます。大人だって子どもと一緒にいる時間が長くて正直窮屈だね、分かる分かる!

賑やかに和気藹々とおしゃべりしている間に楽しい1日が過ぎて行きました。

最初は「我が子に遊び場を」「ご近所さんと遊べる場を」と思って始めたことな広場ですがいつの間にかみんなが集う場所になっていました。ここに来れば誰かがいる、そう思うて来てくれる人もいます。これに嬉しさと、改めて緊張感を感じています。

今年はこのことな広場での出張プレーパークは予定されていないけれど、きっと私達は大丈夫、いつも子どもへのまなざし「の応援を感じながら、これからも地域の仲間と等身大の遊び場を作っていきたいです。」

(ことな広場代表 まめちゃん)

「とうきょうブレイダーInstagramフォトコンテスト2020〜未来に残したい東京のあそび風景〜」金賞受賞作品
子どもたちの挑戦はまだ続く

日野市には多摩川、浅川の2つの川が流れています。特に浅川は水質がよく遊ばないともったいない豊かなフィールドです。しかしながら「川は危ない」「川は汚い」と子どもを川から遠ざけてきたように思います。そして最近「川で子どもをどうやってあそばせたらいいか解らない」という声まで聞こえてきます。川であそぶ楽しさはもちろん、危険を察知する力まで奪ってしまったのではないのでしょうか。

「川のプレーパーク」では、河原にテントを建て、地域の小学生が一日お母さまの下で、川であそびました。心も体も解放して遊び込む子どもたちの姿を見守る私もとてもしあわせな気持ちでした(くらみん)



なかだの森でつながる



ふれあいの森はみんなの宝
 森のかぶり、子どもの歓声、
 へんばぽん、へんばぽん
 やまぼうし 伊藤さん

ふれあいホールのカフェを運営している「やまぼうし」の理事長さんです。バイタリティーあふれて、いつも新しいアイデアが満載!

自然の中で 子どもも親も育ち合い 外遊びサークル

「はだかんぼう」の仲間たち
 10年以上前から子どもへのまなざしの仲間として活動している乳幼児の外あそびサークル「はだかんぼう」。子育てのはじめの一歩で出会った仲間と共に子育てした日々はその先も自分の中で大切な軸となり、絆となります。毎年メンバーが入れ替わりながら、今も仲間たちが割り続ける「はだかんぼう」がずっと繋がっていることをとても嬉しく思っています。



桑ハウスを通して、これからも

緑と清流課と子どもへのまなざしの関係は、仲田の森蚕糸公園がまなざしさんの「なかだの森であそぼう!」の開催場所となっていることや、公園の清掃や草刈りなどを委託していること、そのほかにも事業の一員としてまなざしさんが参加していたり…と様々なところで顔を合わせています。今、その仲田の森蚕糸公園のホットな話題と言え、仲田の森蚕糸公園の中にある「第一蚕室(通称:桑ハウス)」の改修工事が終わり、きれいな姿になったことではないでしょうか? この改修工事を行う前段階で、近隣の自治会・学校・商店会や公園で活動していた方にご協力いただき、協議会を開催して、どのように直していくかどう活用していくかを話し合いました。この協議会にもまなざしさんは参加してくださり、改修工事の方向性を決めました。昨年からの新型コロナの状況もあり、皆様へのお披露目ができていないのが現状ですが、きれいになった建物を放置するわけにもいかないの、毎月ボランティアの方とお掃除会を行っています。まなざしの皆さまにも参加していただき、個人的には和気あいあいとお掃除をするつもりなのですが、真剣に、黙々と掃除をしています。掃除をしていると、遊んでいる子どもたちも「何してるの?」と興味津々で見に来ます。いろいろな所属の大人たちとお父さんお母さんが何かをしているところ、普段とは別の一面を目にする…というの、つながりの一種かな?と思います。これからもいろいろなところで協力いただけたらとっても心強いです。(日野市環境共生部緑と清流課 原田さん)

2020年度、コロナウィルス感染拡大により、今まで対面で行ってきた多団体との様々な会議が一時的に中断しました。このコロナ禍で対面で行っていたもの、全面オンライン会議に移行するもの、オンラインと対面の併用など、主催団体が様々な工夫を凝らしていたように感じます。市民有志の勉強会は中断、イベント、中でもお祭り関係はすべて中止となりました。市民活動は人との関わり合いを大切にしていたので、ほとんどの団体がコロナ禍の影響を受けています。その中で

活動を継続していくためには、協働主義にとらわれず「今、私たちにできること」を他団体と共に探っていくことが大切になります。そして、協働事業とは形式的なものではなく、日野市を大切にしたいを共有することが大事だと感じました。今年度は、なかだの森であそぼう!の活動場所である「仲田の森蚕糸公園」を同じように大切に想っている皆さんからの声を集めました。まだまだ大変な時期が続きますが、共に頑張っていきたいです。これからもよろしくお願ひします!



みんなの発見がある場所

仲田の森遺産発掘プロジェクトの皆さん
 なかだの森であそぼう!開催中に桑ハウスの調査をされていた時に、「子どもの声が聞こえていいね」と温かいまなざしを向けてくださいました。



ゆたかな体験!
 「あさ」「ふゆ」「はる」「あき」「こけい」など
 諸先輩もみまかせ愛しい活動を世代を超えて

蚕糸の会・日野 柳本さん
 子どもたちとカキコへの愛が溢れるパワフルな柳本さん!いつもなかだの森の桑畑で汗だくで作業していらっしゃいます。



NPO法人ゆめのめ
 どんなに重い障がいであっても、地域社会でみんな一緒に成長していこう!重症心身障害児及び医療的ケア児を対象とした多機能型児童発達支援・放課後等デイサービス「デイケアルームフローラ」を運営しています。

どんなに重い障がいがあっても 生まれ育った地域で子どもらしく過ごせる場所

「ゆめのめ」の皆さん
 なかだの森は、重度の障がいのある子どもたちにとっても子どもが主役でいられる場所です。障がいがあることで室内で過ごすことが多く、車いすでの移動が必須でお出かけが困難な子どもたちにとって、コロナ禍でますます行き場やあそびの機会が減ってしまいました。なかだの森には、どんな子どもでも笑顔で迎えてくださる森の活動を支える素敵な皆さんがいて、ハンモックにブランコなど身体が不自由でも一緒に遊べる遊具を設置して下さっているので、楽しく遊ばせていただいています。障がいがある子がいる家庭では、そのきょうだい児も遊びの機会が少なくなってしまう場合がありますが、きょうだいも外で一緒に思いっきり体を動かして遊べて、家族も気負いせず遊びに行けます。(代表 大高美和さん)



地域のあそび場を自分たちの手で...

団体設立当初より、自分たちの居場所は自分たちの手で整備しようと除草や清掃を自主的に行っていました。その実績が認められ、2013年4月より日野市から業務委託を受け、「なかだの森蚕糸公園」の公園清掃などの作業を行っています。清掃などの作業を通して、地域の方々の「なかだの森」への想いを何う大切な機会ともなっています。

「次の時代を生きていく子どもたちにとって本当に大切なこと」をより多くの方たちと考えるために情報発信をしています。

目の前の人に、丁寧に。

「今を生きていく子どもたちにとって本当に大切なこと」をより多くの方たちと考えるために情報発信をしています。

団体のお知らせや報告だけでなく、読んでくださった皆さんの心がちよっとでも軽くなったり、一歩進むきっかけになるような広報を目指しています。

昨年度は、参加してもらったことで社会を変えよう、と活動してきたままで、「さあ、これからは」の一言が書けず、苦しい気持ちになる一年でした。同時に、「コロナ関連のお知らせ」をしっかりと読んでくださり、場に来ないことで応援してくれている皆さんの存在を感じ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

今、改めて「一人ひとりの今の気持ちを丁寧に聞かせてもらいたい」という気持ちが大きくなっています。「コロナ禍だからこそ伝えたいこと」を発信していきたいと思

【2020年度実績】
なかだの森通信 (45号/会員には毎月3部ずつ送付)
メルマガ「今月のまなざし」
(63号-74号/配信数 464部)
facebook、Instagramも随時更新中
<ウェブサイト>
子どもへのまなざしホームページ
なかだの森ブログ、野外保育「まめのめ」ブログ



メルマガ「今月のまなざし」ではご登録いただいた皆さまにまなざしの今をお伝えしています。(毎月第1木曜日配信)

2021年4月から日野市立病院にて
病児一時預かり室「おさんぼ」を
運営しています

2021年4月、新規事業として日野市立病院の福利厚生の一環としての「病児一時預かり事業」を受託し、病児一時預かり室「おさんぼ」を運営しています。

2020年8月より、この委託事業に関して理事会で検討を始めた。今まで全く経験がない分野の事業であり、12月の臨時総会にて病児一時預かり事業にチャレンジすることを決定しました。

「子どもにとって」を考えた時、具合が悪い時は安心できるおとなの傍らで過ごすことが望ましいのは当たり前です。しかし、理想と現実の狭間で苦しい思いをしている人たちがいるのなら、「今私たちが出来ること」を探ることが市民活動の使命でもあったと考えました。

「コロナ禍で、私たちは地域医療が崩壊すれば市民の命が危険に晒されることを目の当たりにしました。日野の地域医療の基幹病院で働く人たちを支えることは、安心して暮らせる地域をつくることでもあるのです。」

また、病児預かりを利用してはいる医療従事者の方々にお会いして、この仕組みがないと子どもを産んで育てるという人生を選択することすらできないという厳しい現実を知りました。それぞれの立場で精一杯子育てをしている人たちに寄り添い、子育て中の人ならではの声を発信することができるのが当団体だと感じています。

病児預かり事業を単に一時預かりというサービスを提供するのではなく、一時預かりを通して子どもと子育てのつながりを大切に相談できる場をつくることで、「子どもがいるからつながる人の輪」をさらに広げることが期待できると考えています。

数か月の準備段階を経て、本格稼働してから

4か月余り、RSウイルスの大流行と相まって病児スタッフは連日忙しかった日々を過ごしています。

今回新規事業を立ち上げる際には新たにスタッフを募り、「当団体の活動に協力したい」「子どもや医療従事者の役に立ちたい」という熱い想いを抱いた心強いスタッフが集まりました。慣れないことも多いですが、病院の小児科や感染制御室と連携を図りながら、今後またたかい家庭的な雰囲気のある病児保育室を目指して奮闘を続けていきます。

(藤浪里佳)



▲「おさんぼ」のロゴマーク

「おさんぼ」も付けたねと
2020年秋から準備し
いよいよ来月から本格稼働
となった頃、「預かり室に
名前をつけたいね」という話になりました。
あたたかいイメージの言葉や絵本のタイト
ルなど様々な候補を考えた中、メンバーの
ひとりから「おさんぼ」ってどう?と聞かれ
た時、その場にいた全員がパツと明るい雰
囲気になったことを覚えています。

社会全体がせわしなく時が流れる中で目的もなく時間制限もない「おさんぼ」をする
って、今とても大事なこともかも!この
預かり室の名前にぴったりだなと密かに
嬉しい気持ちになりました。

病児、病後児だけでなく、利用している子
育て中の人もゆったり過ごさせて、おさんぼ
に出かけるくらい気軽な気持ちで利用で
きる場所になったらいいなと思っています。

リーダー 山本 祐貴
小野 絵里

■正会員

安井 清美 さん/安養寺 義経 さん/伊藤 さおり さん/井戸川 雅子 さん/遠藤 美花 さん/遠藤 美和子 さん/遠藤 良太 さん/
 角山 由生 さん/角川 ちひろ さん/丸山 佳代子 さん/菊池 幸子 さん/近藤 千富 さん/佐々木 ふみか さん/佐藤 美保 さん/
 佐伯 のどか さん/佐伯 有香 さん/坂 有希子 さん/三上 紗恵子 さん/山崎 優子 さん/山本 祐貴 さん/志水 英子 さん/
 篠原 仁美 さん/渋谷 貴史 さん/小俣 実穂 さん/小野 絵理 さん/織田 奈緒子 さん/森田 聡子 さん/神部 明日香 さん/
 諏訪 和 さん/西脇 英子 さん/西脇 大介 さん/青柳 真実 さん/石坂 あや子 さん/石田 淳子 さん/千勝 里美 さん/
 浅見 義孝 さん/浅見 久美子 さん/村井 知子 さん/大神 真美 さん/中原 緑 さん/中島 愛子 さん/田村 美保 さん/
 田部井 絵美 さん/渡辺 綾子 さん/渡邊 さち さん/嶋田 綾乃 さん/嶋田 真 さん/内藤 勘太郎 さん/紫木 京子 さん/
 菱山 千絵 さん/峯崎 由美子 さん/北澤 尚子 さん/本庄 亜樹 さん/本庄 正宏 さん/茂木 俊晋 さん/林 さなみ さん/柳澤 桂子 さん

■応援会員

Flame さん/栗澤 雅富美 さん/栗浦 聖子 さん/伊藤 完 さん/羽賀 陽子 さん/永谷 圭子 さん/遠藤 美津子 さん/奥村 典夫 さん/
 横山 亜紀子 さん/岡 純子 さん/加藤 知奈津 さん/河野 真実 さん/漢人 陽子 さん/岩見 千代子 さん/亀ヶ谷 菜花 さん/
 久保 栄一郎 さん/久保 結 さん/久保 七子 さん/久保田 茜 さん/宮原 洋一 さん/宮田 玲子 さん/金沢 綾 さん/金谷 有美 さん/
 景谷 かおり さん/原 めぐみ さん/古澤 翼 さん/後藤 千恵 さん/高野 久美子 さん/合同会社ビヨンド さん/佐々木 隆志 さん/
 佐藤 光昭 さん/佐藤 浩子 さん/佐藤 順子 さん/佐藤 由美子 さん/山田 友子 さん/市村 純子 さん/諸星 智子 さん/
 小峰 奈津江 さん/小野 美知子 さん/小林 じゅん子 さん/松本 景子 さん/森田 ちとゑ さん/森田 武雄 さん/青柳 拓二郎 さん/
 石橋 鈴子 さん/石川 久恵 さん/石附 真弓 さん/川手 麻里 さん/前波 奈緒 さん/早川 ふみ さん/大村 悠季 さん/滝 理絵 さん/
 瀧島 崇子 さん/瀧島 聡 さん/池谷 裕之 さん/中村 祥子 さん/長澤 香織 さん/塚田 恵子 さん/田上 美穂 さん/田中 香織 さん/
 土屋 和子 さん/徳久 ウィリアム さん/能村 悠子 さん/能村 祐輔 さん/馬場 明子 さん/八木 祥子 さん/番匠 建作 さん/
 米澤 茂 さん/北見 みゆき さん/木之下 怜香 さん/林 麻子 さん/鈴木 久子 さん/濱 絵美子 さん/齊藤 藍子 さん/高崎 真由美 さん

■ご寄付

(株)こうゆう 様/イオンリテール(株) 様/栗澤 雅富美 様/遠藤 美花 様/遠藤 美和子 様/奥 茂 様/岡村 めい 様/
 丸山 そよ子 様/菊池 幸子 様/横口 陽二郎 様/合同会社キクダイ 様/合同会社ビヨンド 様/根津 美満子 様/斎藤 広美 様/
 三上 紗恵子 様/山岸 昌美 様/山崎 優子 様/山城 隆盛 様/山村 誠 様/志水 達雄 様/篠原 仁美 様/柴崎 栄 様/
 渋谷 裕子 様/小嶋 千帆 様/生地 由起子 様/青柳 真実 様/川合 佳織 様/村井 知子 様/大竹 久代 様/中川 純 様/
 中川 哲 様/中川 満 様/嶋田 かれん 様/渡邊 直美 様/藤井 智 様/内藤 亜希 様/八木 祥子 様/片岡 久美 様/峯崎 由美子 様/
 本多 俊和 様/本多 和子 様/木村 奈津子 様/門野 朗子 様/野外保育まめのみ 保護者有志 様/鈴木 将樹 様/
 濱 絵美子 様/生活クラブ生活協同組合・東京 様(エコロ子ども基金助成金)/帝人株式会社 様(ボランティアサポートプログラム)

※様不同 氏名公開可の方のみ
 ※2020年4月1日～2021年3月31日にご支援いただいた方のお名前を掲載しています。

「イオン幸せの黄色いレシートキャンペーン」2020年度は、22,800円のご寄付をいただきました。
 レシートを入れてくださった皆様、ありがとうございました！

その他、なかだの森であそぼう！の募金箱や、書き損じはがき・切手でのご寄附など、
 2020年度もたくさんのご支援、本当にありがとうございました！

■ 2020年度 職員

正規職員
 伊藤完 / 大村悠季 (2021年3月31日付退職) /
 亀ヶ谷菜花

保育スタッフ
 伊藤亜紀子 / 小野絵里 / 峯崎由美子 /
 村井知子 / 篠原仁美 / 山本祐貴 / 茂木暖子

送迎ドライバー
 田極薫 / 中川純

公園管理スタッフ
 三上紗恵子 / 茂木暖子 / 篠原仁美

事務局スタッフ
 松永由希子 / 濱絵美子(2020年12月31日付退職) /
 仙田恵実 / 柳澤桂子 / 久保七子 / 内藤亜希

■ ボランティアスタッフ

鈴木忠宗 / 黒岩三男 / 鈴木久子 / 八木祥子

■ 理事
 理事長 中川ひろみ
 理事兼事務局長 藤浪里佳

理事 中野錦亨 / 松永由希子 /
 小俣彰男 / 塚本幸治

監事 本庄正宏

～子どもの未来をともに考える仲間たち～



2020年度も、
 たくさんのご支援ありがとうございました！

子どもを真ん中に考える社会へ
 これからも皆さんとともに…

2020年度 決算報告

NPO全体の収支

収入の部

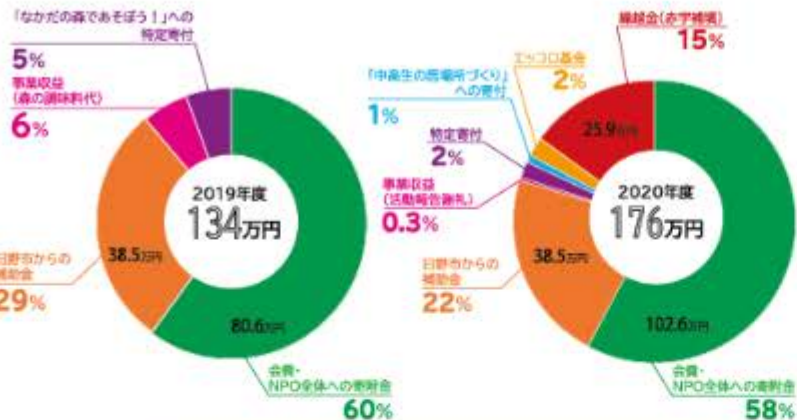
項目	2019年度 金額(円)	2020年度 金額(円)
自主事業収益	20,245,902	20,202,260
委託料(公園管理)	1,314,000	1,362,000
寄附金	892,571	412,807
会費	562,000	614,000
補助金・助成金	543,000	1,196,530
その他	4,226	6,055
計	23,561,699	23,793,652

支出の部

項目	2019年度 金額(円)	2020年度 金額(円)
人件費	16,741,589	17,003,685
その他の経費	5,742,119	6,223,293
消費税	922,600	980,300
法人税等	70,000	70,000
計	23,476,308	24,277,278
収支差額	85,391	▲483,626



▲アマゾンほしい物リストで頂いた物品は、団体の活動で大切に使用させていただきます。ありがとうございました。ほしいものリストへの寄付は今後も継続して募集しております。



コロナ前と現在「なかだの森であそぼう!」活動資金の内訳

※活動資金増減の主な理由は人件費のベースアップによるものです

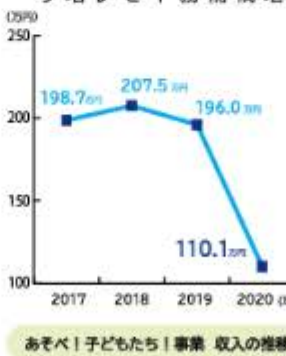
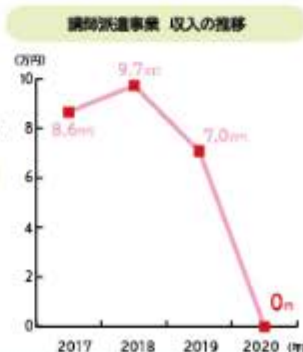
2020年度を振り返って

2020年度は、新型コロナウイルスの感染状況への対応に追われた一年でした。日本財団が行った調査によると、非営利団体のほとんどが、運営や活動、事業に何らかの影響を受けているという結果が出ました。

当団体の財源は、大きく分けて
 ①自主事業収入
 ②委託事業収入
 ③寄付や会費
 で成り立っています。事業収入が減り市民活動そのものの継続が難しい団体がある中で、何とかこの一年を乗り越えることができたのは、多くの方から継続してご支援いただいたおかげです。改めて、心より感謝申し上げます。

「子どもが主人公の居場所(プレーパーク)事業」や「あそべ!子どもたち」事業、「講師派遣事業」などの自主事業収入が減り、最終的には赤字決算となりました。NPO全体を管理している管理費は、自己資金と自主事業収益で賄っていますが、管理費をカバーできるだけの事業収入を得ることができませんでした。安定しているように思える当団体の運営も、実は自主事業収益が減ると途端に危ういものとなるということが確認できた年でした。

経費としては、昨年度より人件費の割合が増えました。職員のベースアップをし、コロナ禍であっても雇用調整助成金を活用して休業補償をするなど、雇用の安定に努めました。事務局は、在宅ワークを可能にするプラットフォームを導入するにあたり、中小企業庁の助成金を受けてIT専門家を派遣してもらったこと、テレワークの体制を整えて在宅での勤務時間を増やしました。現在は、職員の勤怠管理もオンラインを使って行っています。



事務局長さんご自身の活動について

事務局長の藤原さんからお声がけいただき、2020年度から関わらせていただきます。私は日野市在住ですが、恥ずかしながら当法人の存在を知らずしていました。現在小学6年生の子どもがおり、就学前は日野市内の保育園に通っていました。わが子は、「保育園でのお昼寝が苦痛だった、もっと遊びたかった。」と、6年経った今でも話しています。まめのめの子もたちと会うと、いつも真っ黒に日焼けして、のびのびしていると感じます。やりたいことを思いっきりさせてくれるまめのために、自分の子どもも通わせてみたかったといつも思うのです。

現在、会計・税務の専門家として関わらせていただいておりますが、本当に皆さんには驚かされたと思います。インターネットを駆使して、効率的なテレワークをあっさり構築。私が何かを言うのではなく、皆さんの中から次々と新しいやり方が生まれています。なかなかこういう団体はないと思います。女性が中心となっている団体だからなのかもしれません。私自身、とても刺激をいただいております。

どんな企業も団体も、誰かのために何かしたいという理念があると思います。しかし、営利団体であれば、どうしても利益が優先となってしまうものです。純粋に子どもたちの居場所を作りたいという当法人の理念は本当に素晴らしいです。ずっと続いてほしいです。会員としても今後もお手伝いしていきます。

公認会計士 税理士
坂 有希子先生

事務局 藤原 佳

Vision

子どもを真ん中に考える社会へ

Mission

「子どもが主人公の居場所」を創り続けよう！
子どもがいるからつながる「人の輪」を広げよう！

To 2021

コロナ禍だからこそ「子どもの今」を大切にしたい。
そのために、大人が考えることを諦めずに
「子どもがあそび育つ居場所」を
たくさんの人を巻き込んで創り続ける

コロナ禍の中で私たち大人に生きる勇気をくれたのは、子どもたちの存在そのものでした。その子どもたちが今、大人が気付かない間に苦しんでいます。

2019年度に引き続き、2020年度も当団体に関わるスタッフのミーティングを行いました。対面での開催が難しくオンラインで実施。コロナ禍の中で社会状況は大きく変化しています。それは活動を始めた12年前と大きく違ってきています。

11月に実施した西野さんの講演会の資料をもとに改めて今の社会状況をスタッフ全員で客観的に捉え、当団体の役割を改めて考える時間を持ちました。その中で「何がそんなに子どもたちを苦しめているのか？」というつぶやきに胸がしめつけられるような気持ちになりました。

「何をどうやるか？」の前に「なぜやるか？」が市民活動には欠かせません。そして何より団体を支えるスタッフひとりひとりの中にある熱い想いが、そしてモヤモヤすると感じる気持ちが原動力です。「オンラインが当たり前になりつつある今、コロナのせいだけでなく人との関わりがどんどん希薄になっていると感じる」「自分のしあわせのためにも人

とのつながりを大切にしていきたい」

「『子どもが主人公の居場所』を創り続けるためには、大人も自分の人生の主人公でなくてはならないはず」「目の前のひとりひとりとの出会いを大切にしたい！」

「私は私、あなたはあなたで大丈夫！」

「凸凹の中の『いいね！』を認め合える」

「たくさんの情報が溢れている中で、今いる場所から温度を持って伝える」そんな発言が続きました。

「考えることを諦めない」これは今年の講演会で西野さんからいただいた言葉です。子どもの犠牲のもとで成り立っている社会のおかしさに気付かないふりをするのはやめよう。子どもの自死を止められない社会でいいはずがない！

“なかだの森”に来てくれている生きづらさを抱えた高校生の「小さい頃に森みたいな所に出会えていればよかったなあ…」というつぶやきがいっまでも胸に残っています。今こそ、大人の覚悟が問われています。多くの人と力を合わせて「子どもがあそび育つ居場所」をコツコツと創り続けて行こうと年度はじめの今、改めて想いを強くしています。



NPO法人 子どもへのまなざし

【住所】〒191-0055 東京都日野市西平山4-18-12

【TEL】042-843-1282 (月～木 / 10時～17時)

【E-mail】info@manazashi2009.sakura.ne.jp

【Web】<http://www.manazashi2009.sakura.ne.jp/>

<https://www.facebook.com/NPOmanazashi/>